



(標準様式～裏)

観点							
1. ニーズの状況変化	<input type="radio"/> A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> D ・ニホンナシ、ブドウについては、特定の品種に偏った生産構造になっており、依然として適切な品種の組み合わせが必要となっている。こうした中で、ニホンナシでは生産性の高い早生品種や自家和合性等の有する新品種が求められている。ブドウの消費者ニーズは大粒種に移行しており、生産者からは、贈答用の赤色大粒品種へのニーズが高くなっている。 ・モモでは、県南部では旧盆前、県北部では川中島白桃の後に収穫できる品種の要望が高い。また、軽労化果樹として、カシス、ラズベリー、イチジクの産地化の動きがあり、産地に適した品種へのニーズが高まっている。 【評価委員のコメント】 ・県内の現状の品種では、生産時期が重複しており、その分散化が期待されている。また、省力低コスト化や高品質化は生産者・消費者両者の普遍的ニーズである。 ・消費者ニーズに適切しつつ、本県果樹それぞれに必要な特性を持った品種の育成、導入に対する生産者の要望は高いと認識している。 A. ニーズの増大とともに研究目的の意義も高まっている C. ニーズの低下とともに研究目的の意義も低くなってきている B. ニーズに大きな変動はない D. ニーズがほとんどなく、研究目的の意義がほとんどなくなっている						
2. 効果	<input type="radio"/> A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> D ・ニホンナシでは、早生品種や省力化が可能な品種の導入により、「幸水」に偏重した労力の分散が図られる。 ・ブドウでは、優良な赤色品種の導入により、黒色、緑色品種とのセット販売が期待され、高収益につながる。 ・モモは、県南部では旧盆前の早生品種の導入により盆需要に対応できるようになる。また、県北部では9月中下旬に販売できる晩生品種の導入により、運出し産地としての有利性が高まる。全県的には、県南産地から県北産地への販売リレーが円滑になり県産モモのブランド化に寄与できる。 ・オウトウ、スモモ、ラズベリーの優良品種やイチジク等の導入により、市場に供給できる県内産果実の幅が広がり多様な消費者ニーズに対応できる。 【評価委員のコメント】 ・いくつかの新品種は完成すると考えるが、省力化のための機能を備えた品種ができるか、本調書からは見えない。 ・成果の普及拡大により、生産拡大が進むことが期待される。 ・産地間競争に勝ち抜くためには、消費者の求める樹種や品種の導入が重要である。他県や民間の新品種の開発状況を常に把握し、生産者よりも早く導入に、情報を発信すべき。 A. 大きな効果が期待される C. 小さな効果が期待される B. 効果が期待される D. 効果はほとんど見込めない						
3. 進捗状況	<input type="radio"/> A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> D ・系統適応性試験(農研機構果樹研究所育成系統) ニホンナシは平成27年に5系統(筑波59～64号)を接ぎ木し、苗木を育成中である(天王分場)。ブドウは平成22年に導入した3系統(安芸津28～30号)について調査したが、28号は赤色系で成熟期が早く糖度も20%を超え有望だが、着色が不安定であり、29号はマスクット香が強いが糖度が低く、30号は花振り、裂果の発生が多かった。いずれも継続調査する(本場)。セイヨウナシは平成25年に3系統(札幌4～6号)を導入し、試験樹を育成中である(本場)。 ・有望品種の適応性試験 ニホンナシは早生種4品種・晩生種1品種・‘秋泉’の受粉専用樹として2品種を導入している。‘香麗’、‘なつみず’が食味良好であったが‘なつみず’に心腐れがあり、‘サザンスイート’は小玉で果形が悪かった(天王分場)。ブドウは赤色や黒色系の8品種を調査した。‘ロザリオロッソ’は発芽、開花の揃いが悪く、着色も不安定で本県での適応は低かった(本場)。モモは、本場で平成27年に4品種を導入し、試験樹を育成した。かつの果樹センターでは12品種を導入し、調査した。‘桃水’と‘光月’がいずれも‘川中島白桃’より糖度が高く、食味が優れたため有望と考えられた。この他、オウトウ2品種・スモモ3品種を導入し、継続調査している(本場)。 ・今後の温暖化に対応した樹種の選抜 カキは、凍害による試験樹の損傷が激しいため、調査を中止した。イチジクでは、‘パナーネ’の耐凍性が高く、適応性が高いと考えられた。‘ヌアールド・カロン’は小玉だが糖度が高く食味に優れた(本場)。 ・ニホンナシ新品種育成試験(天王分場) 平成25年に一次選抜した10個体の内9個体を淘汰した。残り1個体は、通常の防除下で黒斑病が発生せず、自家和合性のある特性が認められ、継続調査を行っている。 【評価委員のコメント】 ・ニホンナシ・ブドウ・西洋ナシ・モモ・オウトウ・カキ・イチジク・ラズベリーと新品種が精力的に検討されている。省力化のキーワードである自家和合性の記載はあったが、自家摘果性の記述がなかった。 ・豪雪による樹体被害等の影響があったものの、概ね順調に進捗しているものと判断する。 A. 計画以上に進んでいる C. 計画より遅れている B. 計画通りに進んでいる D. 計画より大幅に遅れている						
4. 目標達成阻害要因の状況	<input type="radio"/> A <input checked="" type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> D 雪害、凍害に伴う樹体損傷。 【評価委員のコメント】 ・いくつかの新品種は完成すると考えるが、省力化のための機能を備えた品種ができるか、本調書からは見えない。 ・雪害や凍害で研究資料を毀損することなく、適切な研究に取り組んで欲しい。 A. 目標達成を阻害する要因がほとんどない C. 目標達成を阻害する要因がある B. 目標達成を阻害する要因が少しある D. 目標達成を阻害する要因が大いにある						
総合評価	<input type="radio"/> A 当初計画より大きな成果が期待できる <input type="radio"/> B+ 当初計画より成果が期待できる <input checked="" type="radio"/> B 当初計画通りの成果が期待できる <input type="radio"/> C さらなる努力が必要である <input type="radio"/> D 継続する意義は低い						
評価を踏まえた研究計画等への対応							
ニホンナシ・ブドウの省力化・低コストのための品種導入については、ニホンナシでは、省力化に繋がる自家和合性をもつ筑波57号(なるみ)、自家摘果性もあわせもつ筑波55号(凜夏)は本県への適応性は低く、試験を終了したが、今後自家和合性および自家摘果性を有するナシ筑波64号を調査していく。また、低コストに繋がる黒星抵抗性をもつ筑波56号(ほしあかり)は本県への適応性は低く、試験を終了したが、今後筑波60～63号を調査していく。ブドウでは、一文字短梢せん定に適応性の高いことが明らかになった品種については、栽培管理上の留意点を示して公表する。また、適粒作業が省力化できる品種の導入についても検討を進めている。							
(参考)過去の評価結果	事前	中間(24年度)	中間(25年度)	中間(26年度)	中間(27年度)	中間(年度)	
	B	B	B	B	B		